

多岐川恭

微笑する悪魔



本格傑作ミステリー

# 微笑する悪魔

岐川 恭

**KOFUSHA NOVELS**

# KOFUSHA NOVELS

## 微笑する悪魔

著者 多岐川 恭

発行者 深見兵吉

発行所 光風社出版株式会社

東京都文京区関口一―三二―四 郵便番号 一一二

電話番号 〇三―二〇四―二四四一 振替東京八―一二九―三

印刷所 誠宏印刷株式会社

製本所 越後堂製本

落丁、乱丁はおとりかえします。

定価はカバーに明記してあります。

© 1984 KYO TAKIGAWA Printed in Japan

ISBN4-87519-546-X

目次

|            |     |
|------------|-----|
| 地獄へ行け      | 9   |
| 歯ざしり       | 49  |
| 微笑する悪魔     | 81  |
| 柔らかい唇      | 112 |
| 靴を脱いだ女     | 143 |
| 振り放し       | 174 |
| 負け犬にねぐらはない | 200 |
| 窓の死神       | 227 |

## 地獄へ行け

### 1

「疲れた？」

と保代が聞いた。

「クタクタだよ。きみは危険な女だ、本当に」

「どうして？」

「男はみな、きみに夢中になって、のめりこんでしまふ。ブレーキをかけようとしても、かからない。なにもかも吸い取られてしまう」

「そうかしら。あたしは普通の女よ。魔女みたいに言わないで」

「普通か。意識しないところが魔女なんだ」

善英はちよつと笑った。

保代は裸身を寄せてきた。善英はやや物憂そうな動作で、保代を抱き留めた。その汗ばんで熱かった肌は、冷えかけている。肌はすべらかで、手触りの良さだけでも、善英をウツトリさせる。

「いつまでもこうしていたいわ。それとも、二人でどこかへ行つてしまいたい」

保代は指先で善英の頭髮をなぶりながら、耳許でささやいた。

「そうはゆかないさ」

「ねえ、あなた時々、急に冷淡になるわ。ふっと素

っ気なくなるの。あたしの錯覚かしら。そんな時は、なにかほかのことを考えているのじゃない？ いまがそうよ」

「別に。それは錯覚だね。ぼくだって、きみといつも一緒にいたいんだけど、現実には許されないことだろう。きみはちゃんとした人妻だし、須本さんは立派な夫だ。それに引替え、ぼくはただのろくでなしだからね」

「そんなこと、どうでも……もっと強く抱いてよ。あたし、怖いの」

「怖い？ なにが？ ぼくらのことがバレるのが？」

「それもあるけど、あたし、須本に命を狙われているんじゃないかと思うのよ」

「冗談言っちゃいけない。須本さんが、どうしてきみの命を狙うの？ 彼はきみを愛しているはずだよ。きみを愛さない男なんて、いるわけがない」

「冗談なんかじゃないわ。あたしたちは三年前に結婚したでしょう？ 結婚後間もなく、生命保険を掛

け合ったの。一億円ずつよ。あたしが死んだら、須本が一億円もらうし、須本が死んだら、あたしが一億円。たしか、保険に入ろうと言いだしたのは須本だったと憶えているけど、あたしも同意したわ。だって、老後のためとか、不慮の不幸に備えてとか、よくそうするでしょう？ でも、いまよく考えてみると……」

「保険金狙いの殺人か。小説の読みすぎだ、と言いたいところだね」

「茶化さないで、あたしはまじめなの。真剣に話してるの」

善英の腕の中で、保代は激しく身をもだえた。抱擁が解けそうになると、彼女はまた善英にしがみついた。

「そういう徴候でもあるの？ なにか、されかかったとか」

「具体的にはないけど、チャンスを狙われているような気がして、仕方がないの。いつでも、彼の目が

光っているような……このままだったら、いつか殺されるんじゃないかと思うの、とても巧妙な方法で。事故とか、自殺とかに見せかけて。一億円の保険つて、へんじゃない？」

「金額が多すぎる？」

「ええ。あたしたちの身分では、多すぎるわ。掛け金だって、一年で何百万という額でしょう？ 須本はなんとかやりくりして、二年分だけは払ったけど、続くわけがないと思うの。だから……」

「須本さんって、どういう人間？」

「どういうって、平凡なサラリーマンというのかしら。特に目立つわけでもないし、落ちこぼれでもないし、まあ、平均より少し上のサラリーマンでしょうね。いい夫だし、とりたてて欠点もないの。でも、彼のそういうところ全部が、仮面のような気がしてるの、すごい悪人じゃないかって」

「きみは疲れているんじゃないのかな。須本さんって人を、ぼくは全然知らないけど、まさかね」

「やっぱり本気にしないのね」

善英はもて余し気味に、保代の背中から腰を撫でさすっていた。

「正直に言つて、半信半疑だよ。彼と一緒に暮すのが、怖くなっている？」

保代はコックリをした。

「逃げたいの、どこか遠いところへ。もちろん、彼に探し出されないとこへよ。そして、あなたと一緒にいたい」

「思い切つて、離婚すればいいじゃないか」

「彼は承知しないわよ。あなたに殺されそうだから、離婚したい、なんて言える？ たと言ったとしても、彼はいつものように猫をかぶつて、とんでもないと、一生懸命に弁解するでしょうし、あたしとしては、どう仕様もなくなるわ。そのうちに、ガスとか、感電とか、自動車事故とかで、あたしはめでたく死ぬことになるの。火事で焼き殺されるかもしれないわね。うまくやったら、火災保険にも入ってい

るんだから、損はしないはずよ」

「別居すれば？ 理由はなんとでもつけられるだろう」

「無理ね。あたしは病気じゃないし、表面的には、生活になんの不足もないんだから。それに、彼はあたしを手離さないでしょう。あたしにかくした愛人でもいれば別でしょうけど、そういう気配はないし」

「それはわかるよ。彼は毎晩でも、きみを抱くんだろう？ どんなにむさぼっても、まだ足りない。きみはそんな女なんだ」

「もうやめて」

保代は乳房を強く押しつけてきながら、唇で善英の口を塞いだ。二人はしばらくからみ合って動いていた。

「考えていることがあるの。身を守るために、どうしたらいいかって。……その前に聞かせて。あたしを愛してる？ はっきり言って」

「なにをいまさら。きみなしでは、ぼくは生きて行けないよ。きみのためになら、なんでもするつもりだ。一緒に地獄へだって行くから、信じてほしいね」

「あたしと結婚したい？」

「当り前だろう。もし離婚ができたら」

保代は満足そうな吐息をつき、体を離して仰向けになり、手足を伸ばした。ダブルベッドは十分に広い。

「考えていることって、なんだい？」

「……待つて。のどが渴いたわ。なにか飲みましよう。あなたも？」

「そうだな」

「ビールがいい？」

「いや、水かジュースがいいな」

「持ってくるわ。このお部屋、暖房が利いているのはいいけど、とても乾燥してるのね。のどがカラカラになってるわ」

「それと、激しかったからな」

「ばかね」

保代は起上がると、体に何も着けず、冷蔵庫に飲みものを取りに行った。善英の視線は、保代の裸身にからみついている。見飽きてもいい頃なのに、保代の美しいふくらみ、へこみ、そしてなだらかな線は、相変らず新鮮だ。

罐ジュース二つを手にも、保代は戻ってくると、ベツドの上に坐った。

善英は一つを受取り、横になったまま、ジュースを飲みだした。

横坐りの保代は、善英の目の前である。保代はのどを反らしてジュースを飲んでいたが、液体が二筋三筋、こぼれだして、のどから胸のくぼみを伝い、さらに下腹部から、少し開き気味の股間に落ちた。

保代は飲み続けながら、濡れて気持が悪いのか、膝を動かし、腰をひねるようにした。

「お行儀が悪いな。シートが濡れたぜ」

「あら、大変」

と言いながら、保代は右膝を浮かし、少しあとずさった。その拍子に、わずかの間だが、かくれた部分が善英の目を射た。彼女の動作は、無意識とも、意識しての媚態とも受取れる。

いずれにしても、善英の欲情は堰を切ったように吹出しかけていた。彼は身を起し、保代の豊饒な太腿に取付いた。

「なにしてるの？ くすぐったいわよ」

と笑いながら、保代は空になった罐をそこらへほうり投げると、両手をうしろに突き、腰を善英の愛撫に任せる姿勢を取った。

善英は保代の肌に舌を這わせている。

「きみのためなら、なんだってするよ」

と、善英はさつきと同じ言葉を、あえぎあえぎ言った。

保代はそのまま、身をよじるようにして、上体をうしろへ倒しながら、サイドテーブルの上のラジオ

のスイッチをひねった。

かなりの音量で、ロックミュージックが流れだした。

保代は両膝を立て、反りかえった。

あまり設備のよくないモーターである。ひっそりしているのだけが取柄だった。

二人が会う場所は、さまざまだ。一つの場所に、二度とは行かなかったが、ホテルやモーターは、どこにでもあるのだ。

金沢のあるホテルのバーで、二人は知合った。ちょうど一年前になる。須本慎一の出張旅行に、保代が付いて行ったもので、夕方、須本がまだ仕事から帰らず、保代は手持ち無沙汰の様子だった。

金沢では、そのまま別れてしまったが、帰京してから、善英のほうから連絡した。保代はその連絡の電話を、心待ちにしていたようで、声が生き生きとはずんでいた。

そして二人は会い始めた。

## 2

慎一が帰宅した時に、保代がまだ外出中であることは、珍しくない。

そんな場合には、保代は電話を入れるはずだ。慎一は空腹をこらえながら、電話を待っていたが、午後八時を過ぎても電話はなく、本人が戻ってもこなかった。

慎一は九時になってから、有り会わせのもので夕食を済ませた。

保代に外出の予定はなかった。あればそのことを慎一に伝えていたに違いない。

十時ごろから、慎一は私製の電話番号帖を使い、保代の友人や、よく行き来する親類へ、次々に電話を掛けたが、保代がきたという返事はなかった。

その晩はそれ以上のことをせず、慎一は寝た。

翌朝、いつものように会社に出たが、何度も自宅

へ電話を掛けた。しかし、ベルが空しく鳴るだけである。

慎一は外で夕食を済ませてから帰宅し、また電話番号帖を手にした。昨夜は東京と、その近郊だけに電話したのだが、保代の知人、親類は、各地方にいる。両親も健在で、福島の外にいたのだ。

電話を掛けた先の返事は、一様に、保代はきていないが、どうかしたのかというものだった。慎一はその応答の仕方を注意深く聴きながら、大したことはないと言ひ、電話を切った。

慎一は最後に、大塚由紀子という、保代の友人の家に電話を入れた。由紀子は高校時代からの親友だと、保代から聞いている。一度、由紀子が水戸から上京した時に、家に泊めたことがあった。

由紀子は結婚し、子供が二人いるということのはかには、慎一はなにも知らない。

電話には由紀子が出た。須本だと名乗ると、由紀子はいつぞやはお世話になりましたとか、ご無沙汰

していますとか、あいさつした。

「保代がお邪魔しておりますでしょうか」

と慎一は聞いた。

「はあ、あのう……見えていませんけど、うちにおいになるように、保代さんはおっしゃったのでし  
ようか？」

「いいえ、そうじゃありません。実は、きのうからいなくなりましたね」

「はあ。いなくなった……」

「ぼくになんにも言わずに、メモも残さずにです。」

心配になって、心当りに電話をしているんですが」

「どうしたんでしょうね。あたしも心配ですわ。なにかあったのでしょうか？」

「わかりません。では、もし保代がうかがいましたら、引留めておいていただけませんか？ 電話ではちよつと、詳しいことは言えませんが、ぼくの心配にはかなり重大な根拠がありましたね。ぜひお願いしたいんです」

慎一は電話を切った。

翌朝、止むを得ない用で、少し出社がおくれると会社に連絡してから、慎一は所轄の警察署に出向いた。

「ぼくの妻が家出したらしいので、捜していただきたいんですが」

と慎一は係りの警官に言った。

「奥さんがいなくなつたのは、正確にはいつごろですか？」

「おとといの……ぼくは会社にいますから、出て行つた時刻はわかりません」

「隣り近所の人を知っているんじゃないですか？」

「いいえ。こちらへくる時に、一応何軒か回って聞いてみたんですが、だれも知りません。大体、近所とはほとんど付き合いがないものですから」

「家出ですか。家出なら理由があるはずですが。」

日頃から夫婦仲が悪いとか、喧嘩したとか。失礼ですが、愛人があつて一緒に逃げたとか。心当りがあ

りますか」

「それが、ありません。ぼくにはさっぱりわからないんです。夫婦仲は非常によかつたし、喧嘩したこともありません。それに、ぼくにかくれて愛人を作っていたなんて、保代に限って、そんなことは絶対にありません。家庭的で貞淑なタイプですから」

「しかし、理由なしに家出はしないでしよう。あなたの知らないことで、なにかあったかもしれないですよ。……まあいいでしょう。行先について、心当りは？」

「わかる限りのところへ、電話はしました。実家にも電話を入れましたが、行っていないんです。それで……」

「なるほど。しかしまあ、おとといだったら、まだ日数は経っていませんね。どこか温泉にでも行つていて、ごめんなさいなんて言つて、ひよっこり帰ってくるんじゃないですか？」

「ぼくをからかっているんですか？」

「いやいや、実際、そんなことがあるんですから。ま、ストレス解消ってわけですよ。専業主婦は、ストレスと言うか、欲求不満と言うか、そんなのがたまっているそうですからね。突然、なにもかもが厭になるってやつです。だからご主人にも話さずに、ふらっと温泉につかってきたり、観光地に行ったりする。解放感を味わうんですかね。あまり心配しないほうがいいんじゃないですか？ もう少し待ったほうが」

「いや、そんなケースじゃないと思います。取上げていただけないのなら、仕方ありませんが」

「取上げないとは言いませんがね。特に心配な点でもありますか？ 例えば自殺しそうだとか」

「それはないと思いますが……しかし、なんとも言えません。非常に内向的で、物事を思いつめるようなところがありますから。ぼくの知らないことで、悩んでいたのかもしれませんが。とにかく、家出自体が異常なんです。これまでになかったことですから」

係の警官の態度は、冷淡とは言えないまでも、なんとなく不熱心であった。

しかし慎一は搜索願を出すことにし、所定の用紙に必要事項を記入した。保代の写真は、翌日持参することにした。

会社に出ると、部長に保代のことを打明け、あす一杯待って、帰らなければ、休暇をもらいたいと頼んだ。

「そういうことなら、止むを得んだろう。しかし、一週間も十日も休まれると困るな。仕事に差支える」

「とりあえず、五日間だけ休ませていただけませんか。その間に見付かればいいんですが、身付からなかったとしても、出社します」

「あきらめるのか？」

「いいえ、探すのは続けます。それに、警察にも搜索願を出しましたから」

「大変だな。いったい、なにがあったんだ？」

「それが、さっぱりわからないんです。悪い夢でも見ているようですよ」

「顔色がよくないな。ゆうべは眠らなかつたんじゃないか？ 気を付けろよ」

と部長は言い、保代の魅力的な容姿を思い浮かべているような顔をした。

翌日は保代の写真数枚を警察署に届けてから出社し、あくる日の朝、上野駅に向った。行先は水戸の大塚由紀子の家である。

警察の搜索活動に、あまり期待することはできない。緊急性がなく、深刻な家出の理由もない。また、家出人、行方不明者は、掃いて捨てるほどいるだろう。

大塚由紀子は、慎一の突然の電話に、驚きを示さなかつた。むしろ、電話があることを予期していたような感じがあつた。保代がきていないと言つた時にも、どこか、ためらいの調子があつた。これは嘘をついて気がとがめたためだと解釈できる。

一身上の問題について、相談する相手は、親しい友人が一番いい。肉親などには、かえって打明けにくいものだ。まして由紀子は、以前から保代とはお互いに相談相手であり、おしゃべりの相手でもあつたことを、慎一は知っていた。遠く離れていても、電話で用は足りるのだ。二人の間の長電話については、電話代がかさむと、慎一が冗談まじりに言い、それを保代が聞きとがめて、ちよつとしたいさかいになつたこともある。

慎一がつけた見当は、違つていなかった。

由紀子は水戸市内のマンションに住んでいた。探し当てるのに時間を食つたが、マンション四階の由紀子の住まいに着いたのは、正午を少し過ぎた頃だつた。

「保代さんは見えていないと、電話で申しあげたはずですけど」

と、由紀子は切り口上で言つた。表情には露骨な敵意がある。

「それはうかがいましたが、とにかくぼくの話聞いていただけませんか。お願いします」

と慎一は頭を下げた。

由紀子は小柄で、健康そうな顔色をしており、行動的な性格のようだが、やや気弱そうなところも見える。目鼻立ちは平凡であつた。由紀子は慎一を押し返すことができなかった。

慎一は部屋に通された。由紀子の母親と一緒に住んでおり、孫たちの面倒を見ている。建築会社に勤める夫は、単身赴任で韓国の支店に行っているという。もちろん、保代の姿はなかった。

「保代さんの行方はまだわかりませんか？」

と由紀子は聞いたが、その質問はそろそろしいものだった。

「ぼくがあわてているのは、保代が自殺するおそれがあるからです。あれは病気なんです」

と慎一は話し始めた。

### 3

慎一も保代も、子供がほしかった。二人は結婚するまでに、それぞれ一度離婚を経験している。

慎一の前の妻は妊娠していたが、夫婦仲がうまく行かないため、勝手に中絶手術をしてから離婚した。生まれてくる子供のため、と慎一はできるだけ譲歩し、離婚を避けようとしたのだが、妻は聞入れなかった。

保代は流産している。保代と前の夫も、性格が合っていなかった。子供が無事に生まれれば、夫婦仲は持ち直したかもしれないが、流産が破局を決定的にしている。

そういう経緯があるので、慎一も保代も、早い時期に子供ができるのを期待していたが、結婚後まる三年を過ぎても、保代に妊娠のきざしはなかった。

慎一には異常がなかった。保代は妊娠しにくい体

質であることがわかったが、絶望的なものではないと、医者に言われた。実際、一度妊娠しているのだ。焦らずに、気長に待つことだ、と医者はなぐさめたが、妊娠しにくいと診断されたのが、保代にはひどいショックだったようで、その後、沈みこむことが多くなった。医者は気なぐさめにああ言ったので、本当は妊娠できない体になっているのではないかと保代が洩らすのを、ばかな想像をしてはいけなさと叱ったこともある。

「流産の時の処置が悪かったのよ、きっと」

と、保代は彼女の考えに固執した。

もう一つ、保代には精神的な痛手が加わっている。昨年の夏ごろから、保代は下腹部の不調を訴え始めた。鈍痛があり、月経も不順である。食慾がなくなり、やせてきた。

専門医に見せたがらないのを、引きずるようにして連れて行ったが、診断は異常なしだった。ただ、子宮に筋腫らしいものが出来はじめており、万全を

期するために、組織の精密検査をしたほうがいいだろうというのだった。

検査の結果は、やはり異常がなく、筋腫は悪性ではなかったのだが、三カ月ごとに病院に診せにくるようにと言われた。

「いまのところは異常がないという意味ですからね。安心してほっぽらかしておく、取返しがつかなくなることもありますからね」

と、医者は冗談めかして言ったが、これは言わずもがなだったと、慎一は思っている。極度に神経質になり、疑り深くなっていた保代には、お前はガンになるぞと宣告されたようなものだったのだ。

保代は一層、内にこもるようになってしまった。慎一のなぐさめは、あまり効を奏したようには見えなかった。

なにかの折りに、保代はよく、死んでしまいたいとか、生きていても意味がないとか、口走った。

慎一は保代の気持をほぐし、明るくするのに腐心

した。休みを取り、保代と共に一、二泊の旅行に行ったりした。

そのうちに、保代も落着きを見せてきた。体調が回復してきたせいもあるのだろうが、死にたいなどという言葉は、口から出なくなり、思い詰めた様子もなくなった。ようやく、結婚当時の快活な妻に戻ってくれそうだと、慎一は一息ついた。それがどうやら、油断だったようである。

「お話の途中ですけど」

と、由紀子がさえぎった。

「おっしゃったことは、とても信じられませんわ。

子供ができないので悩んでいるとか、ガン・ノイローゼになっているとかおっしゃったけど、保代さんはそんなことを、一ことだつて言いませんでした。そういう種類の悩みこそ、親友のあたしに、第一番に打明けたはずですよ。嘘だわ、子供ができにくいなんて。筋腫とか、ガンの話も嘘でしょう。保代さんは、あたしがうらやましく思うほど健康そうで、

きれいでしたわ。死ぬなんて……保代さんに死ぬ意志なんかありません。生きたいからこそ、あなたのところから脱け出してきたのに」

由紀子は頬を紅潮させ、目は怒りに燃えていた。

保代がやってきたことを、みずから認めてしまったのだが、それはもう、問題ではないという調子だ。

「嘘じゃありません。どうしてもぼくが嘘をつかなきゃならないんです？ 自殺するおそれがあるから、急いで探し出さなきゃならないですよ。そのために、ぼくは五日間の休みを取りました。できるだけ、自分の手で探し出すつもりです。警察にも搜索願を出しましたが、あまり当てにはできませんからね。生きたいから、保代が家出したとおっしゃったのは、どういう意味ですか？」

慎一も表情をこわばらせていた。

「保代さんは確かにうちにいらっしやいました。二、三日泊めてくれということ、わけを聞いたら、主人から逃げてきたというんです。あなたは保代さん